

【報告③】

ドイツから影響を受けた日本人建築家たち

堀 勇 良*

目 次

松ヶ崎萬長のこと
妻木頼黄・渡辺譲・河合浩蔵
バックマン留学職工
秩父忠鉦・津田弘道・村上胖
矢部又吉のこと
デ・ランデ事務所の所員たち
ユーгентシュティルの建築と建築家

今日のテーマでありますデ・ランデに関しましては、おそらく日本で最初にデ・ランデを紹介されたのは、坂本勝比古先生だと思います。本日、デ・ランデに関して坂本先生にお話頂きました事は、非常に良い選択だったと思いますけれども、私も最初にデ・ランデの名前を拝見したのは、坂本先生の『明治の異人館』という昭和40年（1965）に出た本でありまして、朝日新聞社から出た大著で当時たしか一万円だったと思いますけれども、当然自分では買える値段ではなく、後に入手を致しましたけれども、そこにデ・ランデという一節がありまして、それ以降、関心をもっていろいろ調べたことがございます。それで私、文化庁に行く前に横浜市役所におりまして、横浜市の仕事の中で、坂本先生は神戸市役所に長く居られたわけですが、神戸は明治中期の非常に異人館らしい異人館が沢山残っているところではありますが、私のいた横浜はそのような建物があつたはずなんですけれども、関東大震災で、殆どなくなりまして、残っているものは昭和期の異人館になります。その当時、30年前くらいでありますけれども、明治の異人館とくらべると見た目には、見栄えがしないということで、横浜市の中なかでも関心が持ちにくい状況でありました。そのような時にちょうど石川町の駅の上の方にですね、現在はイタリア山庭園になっているところがありますが、その敷地を横浜市が入手しようということがありまして、そこに明治の西洋館をもつてくることができなかつたということになり、でそのときにですね、信濃町にありましたデ・ランデ邸をですね、当時は三島邸でありましたけれども、それを横浜に移築できないかということで、少し考えたことがあります。堀内正昭先生のお話にも出てきましたが、藤森照信さんに相談しましたら、デ・ラ

*文化庁参事官（建造物担当）付

ランデ邸は東京からは出さないということで、すぐに諦めましたが、タイミングとかいろいろな状況がありまして、欲しいといったからといって手に入れられるものではないんですけども。いろいろな巡り合わせでたまたま渋谷のほうでですね、これも外国人建築家でガーディナーって方が設計されました内田定植邸という渋谷の南平台というところにありましたが、これも明治の末のデ・ランデ自邸とほぼ同じ時期の洋館ですが、それが壊されるというようなことがありまして、じゃあまあそれをどうにか横浜のほうにもってこられないかということになって、石川町の駅の上のイタリア山庭園に「外交官の家」という形で公開されて重要文化財にもなっているわけでございます。そういうようなことがありましてこのデ・ランデ邸もですね、信濃町には居ることはできなかつたようですが、近々、江戸東京たても園のほうで復元されるということですので、結果的にはどちらも良かったのかなと思っている次第です。

今日はちょっと因縁深いというようなことを個人的に感じておりまして、さきほど、堀内先生からもドイツ人建築家について、滞日中のことに関してはそれなりに分かるんだけど、ドイツのほうの情報は日本ではなかなか調べづらいというお話しがありましたが、デ・ランデに関しても、堀内先生のお話しされたエンデ&ベックマンのことに関しましても、先程坂本先生のスライドのなかにもありましたデ・ランデのご夫妻の写真とか、ドイツハウスのパースの図とかですね、そういうようなものは、今日この会場に来ておられますが、マイト美智子さんという方が現地でいろいろ調べて頂いて、かなり前から私どもなり坂本先生なりに情報を頂いたものを今日いくつかご紹介させて頂いてるということでございます。たまたま、昨日、マイトさんから電話がございまして、日本に今来てるということで、実は今日こういう会で坂本先生も堀内先生もしゃべるんだという話をしましたら、本当はこちらが行って挨拶しないといけないんですけども、今日ここにきていただけるということになって、それがたまたま昨日の今日の話なんですけど、今日デ・ランデに関してしゃべらせて頂くことが縁になって何年ぶりにお会いすることができましたので、この場を借りて妙なことでございますがちょっとご紹介させていただいた次第でございます。

本日私に与えられたテーマは堀内先生の話とは逆にドイツの影響を受けた日本人の建築家ということでございます。二つあるかと思えます。直接的にドイツに行って建築の勉強されて日本で建築家として活躍されたということ。それからもう一つはドイツの建築をなんらかのかたちで勉強されてそれをモチーフにして建築を創った方というようなことになろうかと思えます。今日の大きなテーマはデ・ランデですので主にデ・ランデを中心とした前と後ろということで。レジュメのほうは戦後建築につながるバウハウスの関連の方達の事も書いてありますけれども、おおよそは明治・大正ぐらいのことでお話しできるかと思っております。

松ヶ崎萬長のこと

まずドイツで建築の勉強をされて、建築家になって活躍されたということでお話ししますと、先程の堀内先生のお話にもあったようにまずは松ヶ崎萬長（つむなが）さんになります。このかたはある意味でやんごとなき方でございます。生まれたときから男爵というような人でございます。孝明天皇の、明治天皇のお父さんでございますけども、その方の遺詔により別家をとりたてる、それから堂上に列せられるというふうになっておりまして。これが孝明天皇の、いわゆる御落胤であるということで、おそらくそうであろうかと思うわけです。そういうようなことで京都の松ヶ崎というところの地名を名前に賜るというようなことになった、きわめて特異な方でございます。そのような経歴の方なので、明治4年（1871）の岩倉使節団の一行としてドイツに留学するということになって、ドイツに13年ですか居て帰ってくるということになるわけです。堀内先生の話にありました栃木の岡田義治さんが詳しく研究されていますが、最初は陸軍の士官になるような教育を受けるということだったようです。途中で建築に転換をいたしまして。当時はベルリン工科大学と言っただけではなかったと思いますけど、先程堀内先生のお話にもありましたエンデが関係した学校ですけれども、そこで建築学を修業したということになってます。帰ってきて、ちょうど明治宮殿の建設が始まった時期ですので、まずは明治18年（1885）に皇居御造営事務局の御用掛になる。それから、1年もたたないときに、官庁集中計画をやるということで、建築局という部署が内閣の中にできる。そこに、最初は事務官というかたちで入るわけですが、そのいわゆる技術者の筆頭技師として、官制的には建築局の4等技師でございますけれども5月3日になるということになって、来日したバックマンを案内することになるわけです（図1）。しかし、華族でございますので、なかなか当時建築家という役割がですね、もちろん民間の建築家っていうのが認められるような時代でもありませんし、官庁の建築家っていうと役人は役人ですけれどもなかなかお公家さんが務めるような

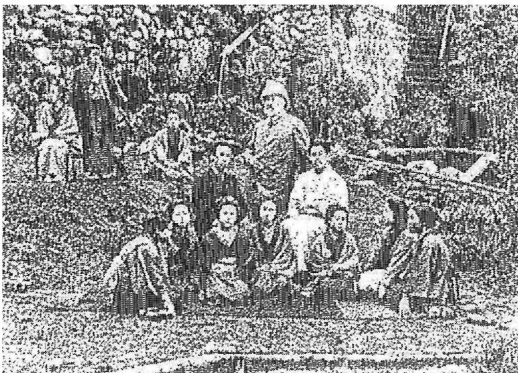
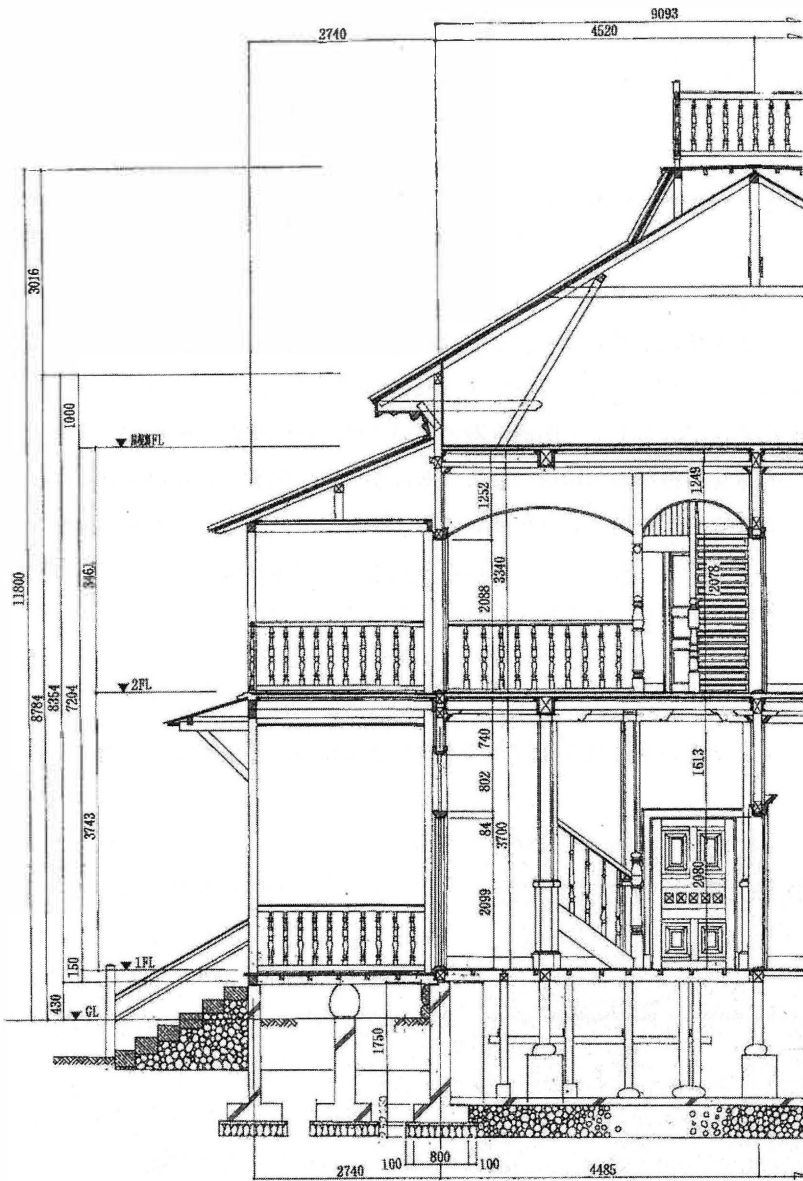


図1 来日中のバックマンと松ヶ崎萬長（『日本旅行記』バックマン）

ところではなかったということになります。しょうか、居場所がおそらくうまくみつからなかったのであろうかと思います。建築界のなかで、最初は日本建築学会の前身である造家学会の創立委員であるわけですが、かなり早い時期に建築学会から退く、除名って形になったりですね。それから、男爵もですね、いろいろあったようで最終的には爵位を返上するようなかたちにもなると。それから台湾に行ってしまうと、そういうようなことで建築家として大きな

仕事を成さなかったというある意味不運の人になるわけです。唯一現存する作品といたしまして、先程堀内先生のところでもご紹介ありましたが、那須の青木周蔵別邸（図2）というのが松ヶ崎さんの現存する唯一の作品ということになるわけでございます。で、これもまあ、



竣工 矩計図〔中央棟〕

図2 青木周蔵那須別邸（『旧青木周蔵那須別邸修理工事報告書』栃木県 1998）

堀内先生がご説明されたドイツ小屋を示したいので断面図を付けましたけども、こういうのが直接的なドイツの影響でございますし、壁にスレートを貼るといのは坂本先生のスライドでデ・ラランデ邸などもそういう手法になっていまして、壁にスレートを貼るはしりはこの建物が最初になるのかなということになろうかと思ひます。これは近年、重要文化財になったものでございます。

妻木頼黄・渡辺謙・河合浩蔵

次は当然、堀内先生のところにもでましたけれども官庁集中計画で明治19年（1886）ドイツに派遣されエンデ&ベックマン事務所で修業した妻木・渡辺・河合の三名の建築家（図3）。松ヶ崎・妻木・渡辺・河合というのが、直接エンデ&ベックマンがらみでいわゆるドイツ派を形成する最初の人たちという風になるのではなからうかと思ひます。やはり意外とドイツにいて勉強した人がいるなという、よくわからない人もいますけれどもそういう印象を持ちます。いろんな意味で後のそういう影響も含めてこの松ヶ崎さん・妻木・渡辺・河合という人たちの留学というのはそれなりに日本の建築界の中で影響を与えたと言えるのではないかと思ひます。それは人脈的にも言えると思ひますし、作風でもある意味ではドイツ風というようなものが、脈々と言ひますか、細々と言ひますか、日本の中で見られるのではないかという風に思ひます。まず、妻木頼黄ですが、これは妻木頼黄の代表作と言つてよろしいかと思ひます。明治37年（1904）、ある意味で自分の好みというか個性まで出せるようになった時期の作品になります。横浜正金銀行の本店、現在神奈川県立歴史博物館になっているものです。これは横浜の馬車道ですが、隅に写っているのがもとの川崎銀行横浜支店で、これを設計された方が矢部又吉というドイツ帰りの建築家です。この方も妻木さんの紹介でドイツに留学し、エンデが関係したベルリン工科大学で勉強をされた方です。時期的には横浜正金銀行本店が明治、川崎銀行

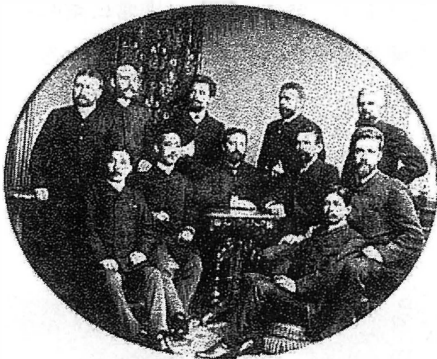


図3 ドイツ留学中の妻木、渡辺、河合（日本建築学会所蔵）

横浜支店が大正ということで時代の違いもありますけれども、ある意味でドイツ風の作風をその時代なりの反映をしているということです。妻木さんは大蔵省、現在で言えば国土交通省の営繕部門でございますけれども、そこのトップにおりました。それからまた、内務技師を兼ねておりましたので、色々な意味で全国道府県の建築技師を差配することができる位置にいたということ、官庁建築界の中で大きな力を持っていた方でございます。ですけれども、ずっ

と官僚建築家として過ごしましたので、個人の作品という形では辰野金吾さんなんかと比べると、やや大作というか主要作が残っていないということがあります。現存するもので言いますと、ドイツの関係と言えばひとつはビールということになりますが、妻木さんはかなりビール工場を設計しておりまして、その中で残っているもので、愛知県の半田市にあります、当時は丸三麦酒ですけれども、先程堀内先生の日本酸素でーフチンバーというのがありましたけれども、これもーフチンバーで、そういうビール工場が残っています。

それから堀内先生の最後の方の話で、いわゆるジャポニズムという話がありましたけれども、妻木さんはドイツ風の建築もつくりますが、いちはやく近代建築に和風を取り入れるというようなことをやっておりまして、その代表作のひとつになります。かなり現在かたちが変わっておりますが、もとの日本勧業銀行の本店、現在は千葉に移築されて、千葉トヨペットの本社だったかな、になっている。それから横浜とゆかりがございまして、桜木町の丘側になりますが、掃部山公園の井伊直弼の銅像の台座の設計をしております。それから、これはもともと東京にあったのですが、現在横浜の山手に移築されて残っている、相馬永胤という横浜正金銀行の頭取だった方の洋館、こういうようなものが残っています。作風的にはなかなかドイツ風とは言えないのかもしれませんが。

三人のうち渡辺譲さんという方は、ドイツ的な建築というのはあまりつくらなかつた人なので、ここには紹介しないで河合浩蔵さんにいけますが、河合さんは先程堀内先生のお話にもあったように、司法省（法務省）の建築（図4）の現場を担当するということになりますが、後に臨時建築局関係の仕事が終わった後、大阪、神戸の、裁判所の建築の設計をする、その後関西の方に定住しまして神戸で設計事務所を開くということで、関西に多くの建築を設計しており、現在もかなりのものが残っています。その中で、三つだけ紹介します。これが独立した後の早い時期、明治43年（1910）の日濠館、現在海岸ビルヂングと言っているもの。それから大正期になって、神戸市水道浄水場の急速濾過場の上屋。それから次の大正7年（1918）の三井物産の神戸支店。この三つとも、現在国の登録有形文化財になっています。時期にもよりますが、だんだんディテールが直線化してくるという傾向があります。全体の印象は非常に重厚というか重々しいというところがありまして、それがある意味でドイツの影響という風になろうかと思えます。それがだんだんディテールが直線化してくる。直線化してくるとだいたいはセセッション系になるのですけれども、全体の骨格がドイツの重厚さを残したままですので、重厚感を残したセセッション系の建築という意味でのドイツの影響を最後まで保持した方なのかな、という気がするわけです。



図4 法務省旧本館（日本建築学会所蔵）

ベックマン留学職工

こういう形で松ヶ崎さん、妻木、渡辺、河合という方達がいわゆる建築家というか、図面をひく側としてドイツに留学して本格的なドイツ式建築を日本に持ってくるわけですが、そういう方達だけでは西洋建築はできないわけで、同時にですね、ベックマンの指導によりまして、建築をつくる様々な職人、それから材料関係、先程の堀内先生のお話で、ベックマンは石とかの建材の調査をしたという話がでていましたけれど、そういう建築材料をつくる技術者を建築家、設計する人とともにドイツに連れて行って勉強させるということになります。それで、こういう人たちが、最初にそれぞれの職場に配置される前に泊まったところが、先程堀内先生のスライドに出ましたベックマン邸ということになるわけです。このいわゆるベックマン留学職工（図5）は有名な話で、各人の名前はわかっているんですが、帰ってきた後、各人がどうなったか、これが意外とわからない。当然この人たちは、ある意味官費で行っているわけですので、帰ってきたら先程の司法省の庁舎などの建築工事に従事しなければいけなかったわけですので、当然ああいう建築をつくる時にこれらの人たちがそれぞれの分野で実際の現場で作業をしたはずですが、なかなかその時の状況、本当に彼らがどういふところをやったのか、というようなことがよく伝えられていないのです。

ある種のグループがございまして、ここの上の5人はそれなりの経歴、学歴を有した方たちです。最初の4人は、東京工業学校、東京工業大学の前身ですが、その卒業生か、卒業を一年残して中退してドイツに留学する。それから彫刻関係の人も必要だということで、工部美術学校彫刻科の卒業生を一人連れて行く。この内藤陽三さんは、残念ながら留学を終えて帰国途中に亡くなってしまいます。

ベックマン留学職工

- ・ 加瀬正太郎 錠前職 東京工業学校卒
- ・ 山田信介 ブリキ職 東京工業学校卒
- ・ 斎藤新平 画工 東京工業学校中退
- ・ 宇野澤辰雄 硝子職 東京工業学校中退
- ・ 内藤陽三 彫刻家 工部美術学校卒
- ・ 清水米吉 大工職→家具室内装飾
- ・ 鎗田作造 大工職→現場監督
- ・ 佐々木林蔵 大工職→オーナメント製作
- ・ 斎藤仙輔 煉瓦積職
- ・ 志村今次郎 石工職
- ・ 篠崎源次郎 屋根職→スレート職
- ・ 吉澤銀次郎 銚職
- ・ 村上治郎吉 左官職
- ・ 市川亀吉 ペンキ職
- ・ 大高庄右衛門 日本煉瓦製造会社派遣
- ・ 浅野喜三郎 浅野セメント会社派遣
- ・ 坂内冬蔵 浅野セメント会社派遣

図5 ベックマン留学職工

それからあとは職人の一群。先程表積みのレンガ、化粧レンガの話が出ましたけれども、そのレンガをつくる会社、日本煉瓦製造会社から派遣という形で大高庄右衛門。セメント会社から二人。このうち、坂内さんという方は東京大学の理学部出身の理学士で、あとの方はいわゆる職人の方でございまして。幾人かは知られているわけですが、加瀬さんという方はいわゆる錠前職として派遣されたんですけども、帰ってきておそらく臨時建築局の仕事をやったんでしょうけれども、後には母校の機械科の先生になって、その後は日本勤

業銀行の監査役みたいなものになって、建築からも離れてしまいます。山田信介さんはブリキ職、いわゆる鋳職として建築の仕事をまっとうされます。おそらく、司法省（法務省）の屋根の銅板部は山田信介さんの仕事であろうかと思えます。斎藤新平さんという方は、帰った後石膏彫刻関係をするんですけども最終的には鉄道の方に行ってしまいます。それから宇野澤さん、この人は後に日本の近代建築の中におけるステンドグラスの創始者ということになりますが、宇野澤さん自身は明治の30年代になりますと、宇野澤鉄工所というのをつくって、もとの本業と言いますか機械科の方に戻ってしまう。というようなことで、職工留学の成果が日本に定着したというところは半分くらいという印象で、内実はなかなかよくわからないということになります。

それでいくつかわかっているようなことで言いますと、篠崎源次郎さんという方が屋根職という形で留学し、帰国後我が国スレート葺の創始者になります。これは篠崎さんがスレート商會に入社する時の広告（図6）ですが、明治20年代以降の建築でスレート葺きの建物はほとんどこのスレート商會がやっているようですので、法務省の建物のスレート葺きなどは、基本的にはこの篠崎さんが指導してやったということになるんであろうと思えますし、先程の堀内先生のお話にあった法務省の化粧レンガ、これは実は最高裁のレンガなのですが（図7）、これらの化粧レンガは大高庄右衛門が指導してということになろうかと思えますし、佐々木林蔵さん、彼は大工職で行ったんですが、どういう事情かわかりませんが石膏彫刻の方をベックマンの指導で勉強したんでしょうね、後に『洋風模様彫刻独習』という本を明治27年（1894）に置土産のように出版をしていたりしますし（図8）、清水米吉さんという方は家具装飾、室内装飾ということで清水製作所というのをずっと最後までやった方でございます。これは先程の横浜正金銀行の内部のインテリアの状況ですけども（図9）、この辺の家具、それからつくりつけの家具などは、この清水米吉さんがいわゆるドイツ仕込みの技術をつかってやったというようなことになります。

実際の臨時建築局がやった仕事の状況はどうかというのはほとんどわからないので

石萬金馬
石盤家根
西洋形平盤土瓦ト口伏を葺各種
全鉛板及亞鉛板葺各種
石盤粧飾品及美術品共
學校用石盤各種
右今般商會ニ於テ
獨逸國ニテ修業セシ
方精食チナシ且販賣仕儀ニ付
ス
廿三年一月十日
京橋區横座二丁目十四番地
スレート商會
篠崎源次郎
チ入前
之通
ヲテ希

図6 「時事新報」1890年1月9日

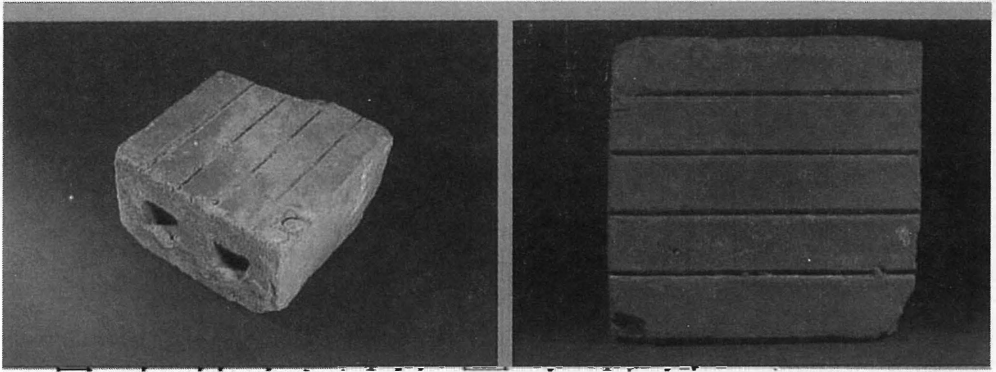


図7 旧最高裁判所使用表積煉瓦（横浜開発資料館『日本の赤煉瓦』1985）

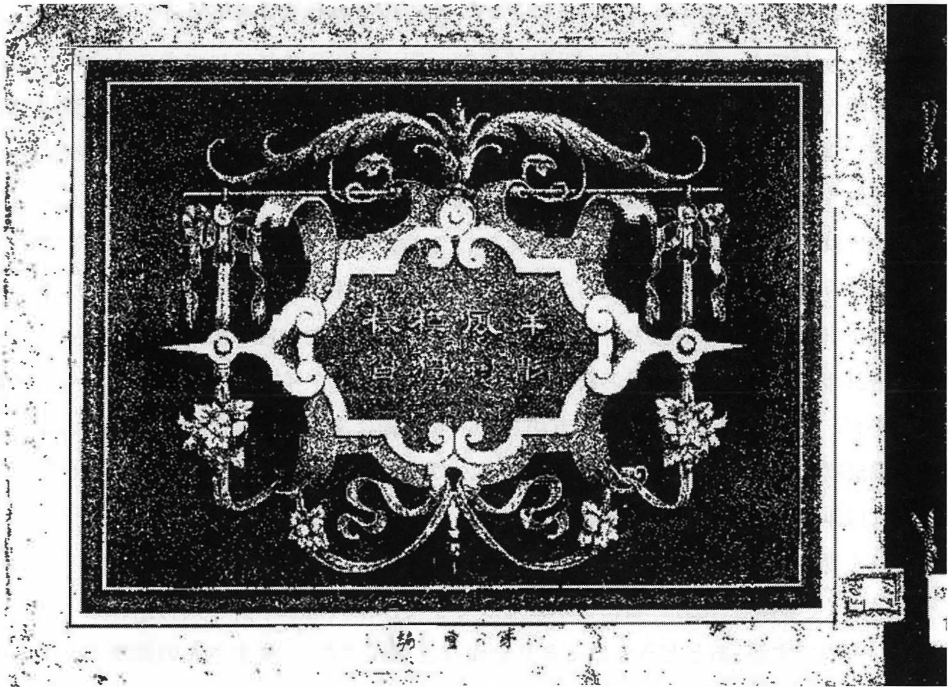


図8 佐々木林蔵『洋風模様彫刻独習』（国立国会図書館所蔵）

すけれども、最高裁判所（大審院）の構造概要のところ、ちょっと読めないと思いますが、表積みレンガのこととかが書いてあります(図10)。名前が出てくるのは、ガラスの宇野澤さん、この辺りだと思うんですけども、宇野澤さんの名前だけが出てきて、確かに宇野澤さんがドイツに留学してステンドグラスの技術を習得して、最高裁では、ガラス関係をやったということはわかるわけですけどもその他の方に関してはなかなかよくわからないというのが実際ですが、もう少し丹念に調べていけば、建築家だけではなくて、こういう職人職工さんたちによ

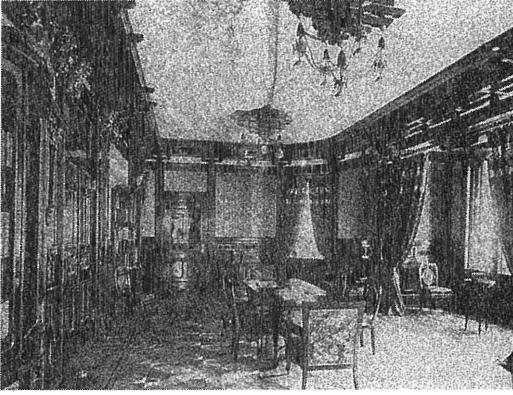


図9 横浜正金銀行本店書見室（『横浜正金銀行建築要覧』）

る細かい技術が付随してはじめて日本の近代建築が現実のものになったという意味では非常に重要であろうという風に思いますし、今後彼らの事績を調べてみるというのは非常に重要な課題ではないかという風に思っています。

秩父忠鉦・津田弘道・村上胖

それから、松ヶ崎・妻木・渡辺・河合の建築家とベックマン留学職工らにやや遅れ

て、ドイツに留学された方が3人います。この3名も後に建築家となります。その一人は秩父忠鉦さんという方です。後に大蔵省の臨時建築部、明治30年代の後半にできる大蔵省の営繕組織になりますが、その技師になる方で、大蔵省臨時建築部の横浜支部における建築係長になりますので、現在横浜に遺っておりますいわゆる赤煉瓦倉庫、これの建築関係の責任者ということになります。一般的には大蔵省の臨時建築部の部長は妻木さんなので、妻木さんの設計と言われますけれども、恐らく具体的なデザインはこの秩父忠鉦さんがかなり大きな役割を果たしているという風に考えているところです。この方も実は生まれた年もよく分かっておりません。たまたまドイツに行くよ、という当時はよくこういう新聞広告を出す習慣があったようでして、明治21年（1888）4月4日の新聞によって4月7日にドイツ留学するよということが分かる訳ですが、ここに載っておられる方がどういう関係にあるのか、ということがよく分からない。一番最初にあるのは、東条英機のお父さんです。軍人さんです。それからその後、小池正直、これは軍医、陸軍の軍医ですね。あと幾人かはどうも医学関係の方のようです。ですので、秩父さんが建築の勉強をしに行ったのかどうかは、判断としませんが、明治21年（1888）にドイツに行く、24年（1891）頃に日本に帰ってきて、東大造家学科の撰科生になったことは判明しているのですが、あとどうもはっきり分かりませんが、妻木さんの関係の仕事がずっとなされて、最終的には横浜の新港埠頭の工事をやるということになる訳です。個人的な作品は全く分かりません。顔写真もたまたま横浜の新港埠頭が完成した時の新聞記事に出ているので分かる（図11）、ということくらいです。ただまあこの倉庫の重厚で実直な感じはまあある意味でドイツ的ということができるとかと思えます。

二人目は、津田弘道という建築家です。この方もよく分からないんですが、来歴といいますが、経歴ははっきりしておりまして、明治期の啓蒙家で有名な津田真道の長男でして、津田真道が亡くなった後、男爵にもなる方なんです。明治22年（1889）にドイツに渡って、30年（1897）までドイツにいたという。その間、ベルリンの美術学校あるいはベルリン工科大学に入って、

「メートル」の距離に椽板を以て境界を造り而して建物下全體を厚二「メートル」に川砂を填充し人工及び水の作用を以て固結せしめたり又其上部に煉砂利地形を施せり該幅員は煉瓦壁の厚薄及び其重量に準し狭きものは巾九十「センチ」より廣きものは五「メートル」に至る厚は悉く一「メートル」五十「センチ」とす

一化粧側石、窓臺、蛇腹及び階段其他外部に使用せる總ての石材は常州産花崗石を施用し之を小叩き或は水磨とせり以上施用の石材は悉く鑿鐵物又は鋸或は大太櫓を以て裏積煉瓦壁及び其他接續せる石材と結合せしめセメントモルタルを以て据付けたり

一階壁厚の如き其薄きは煉瓦石三枚半其厚きは六枚半とをなし一階より三階に至る毎階に漸次厚半枚或は二分五厘を減し又震災豫防の爲め合階毎に幅四寸五分厚三分の鉸聯鐵を用ひ建物全體を輪環にし之を布き込み間仕切及外壁との取合其他危險の懸念ある箇所は豫防の爲め悉く平鐵製鑿鐵を使用し各追持及び追持天井等は豫じめ其機關を防ぐ爲め鐵材を以て結合せしめたり又煉化石積及石積はセメント入りモルタル或はセメントモルタルを施用せり

一建物に使用したる總ての煉化石は武州深谷町日本煉化製造會社の調製に係るものにして就中化粧顯し積煉化石は備州白土を適度に混和したる特別注文品なり

一床梁は鐵梁或は木梁を用ふ而して之を支持せる左右の煉化壁とは鑿鐵物を以て接合せしめたり

一屋根の小屋は總て松材を施用し其小屋梁及敷桁等は悉く煉化壁に鑿鐵管を以て結合をなす又中央階段及大法庭の大小屋は震動豫防の爲め陸梁毎に平鐵材を以て二重山形に締付たり

一屋根の上部は石盤板を以て之を覆ひ明取窓、軒樋、谷廻り及び其他雨害滲入の慮りある箇所は悉く銅板を以て張合はせ加之外部蛇腹及化粧石上部は總て銅板を以て被覆せり煙筒の如きは煉鐵を以て上部を調製し小屋梁上より鑿鐵管を以て煉化造下壁と連結せしめたり

一中央階段の天井明取は工形鉛線を粘付し焼付色硝子を嵌め込み各種の模様を顯出したる英稱ステイント、ガラスを以て室内を透明ならしめたり該品は鑿鐵乙國に於て其の工作を研究せし宇野澤辰雄氏の製造に係るものなり

一各昇降口及大法庭出入口枠及唐戸等は總て機製にしてワニスを塗抹せり其他各出入口は總て機製なり其の過半は内務省日比谷練兵場内の一隅に設置せる工作場に於て機械力を以て製作したるものにして上等ベンキを以て塗上げたるものなり

一廊下敷石は建築工場内に於て製作したる人造石を敷設したり

一暖温器は獨乙國「ハノーバル、ケルチング」會社の最近專賣特許に係るものを用ひたり

一右之外猶ほ詳悉掲げんことを要點多々之れありと雖ども或は觀縁に

図10 妻木頼黄「新築三裁判所庁舎構造の概要」(『建築雜誌』1897年2月)

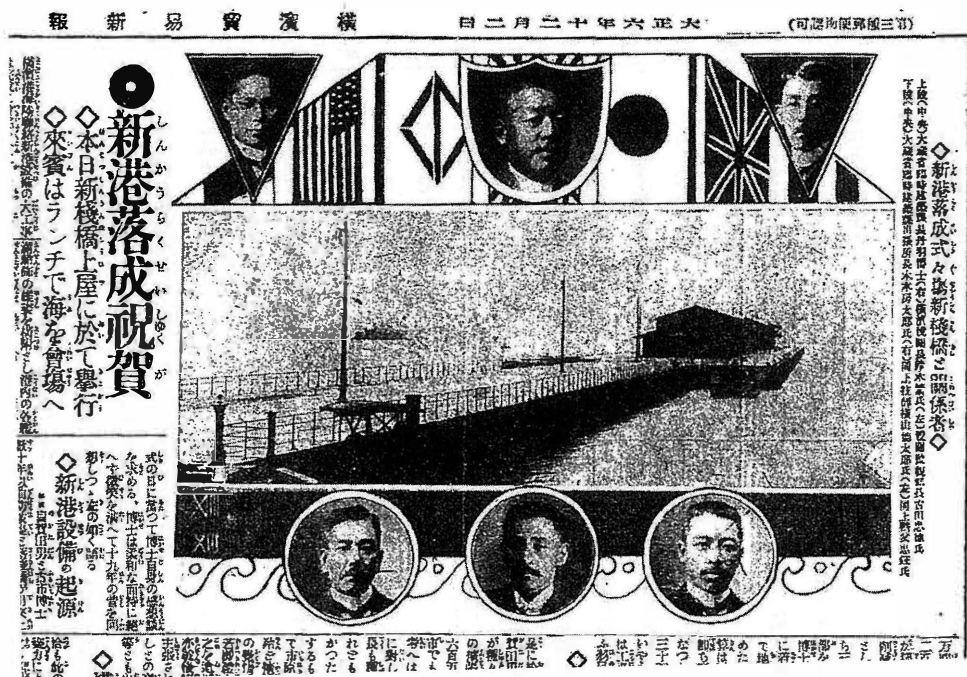


図11 「横濱貿易新報」1917年12月2日 下段の左が秩父忠鉦

エンデの指導を受けたということが分かっています。それで帰ってきた後、このレジユメにもありますように、東宮御所御造営局に入りまして、赤坂の迎賓館の造営チームに入って、設計関係をなされたのだと思いますが、それが一通り終わった、目途がついた明治38年（1905）に東宮御所御造営局を辞めて、後に津田工業事務所という建築事務所を開く、その時の作品が麹町銀行の支店（図12、13）や河合銀行の支店（図14）で、残念ながら、現存する作品はないようです。建築関係の雑誌などでいくつかの作品が分かるというだけです。いわゆるセセッション風に近いデザインの作風ということで、河合浩蔵さんの作風と比べると、デ・ラランデに近い時期の作品になるのではないかという風に思います。私どもはよくわからない方がいると、一番調べやすいのはですね、ご遺族を見つけることなのですが、ご遺族を見つけるにはお墓を見つけるのが早いということでよく墓地巡りをします。これは津田弘道さんのお墓なのですが、津田家という形になってまして、津田弘道さんの名前は一切ございません。墓標にあるのは津田真道さんご夫妻の名前だけでございまして。残念ながらここで津田弘道さんの関係のものをお示しすることはできません。谷中の霊園にあります。実は谷中には妻木さんのお墓も津田さんの近くにあります。

三人目は、ほぼ同じ時期にドイツに行かれて、これもデ・ラランデと同じ学校で勉強をされたという風に言われている方でございまして、村上胖と言う建築家です（図15）。出身は山口



図12 越前銀行（『建築写真類聚 銀行会社 巻一』1916）

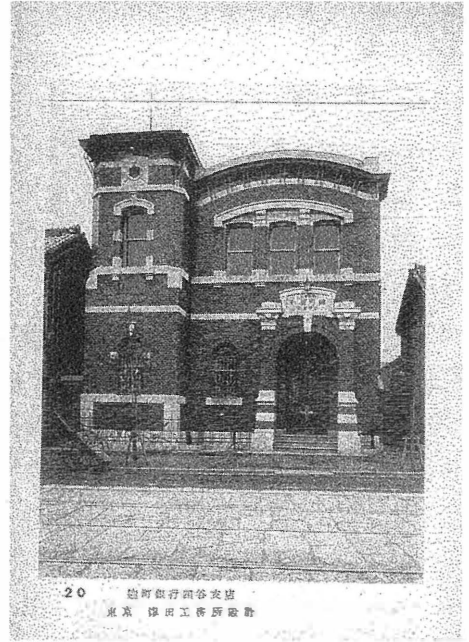


図13 越前銀行四谷銀行（前掲、『建築写真類聚 銀行会社 巻一』）



図14 河合銀行番町支店（前掲、『建築写真類聚 銀行会社 巻一』）

県でして、長州藩の幕末維新期に活躍された方のご子息だそうです。この方は最後には鉄道院の技師になりますので、官歴はよく分かっておりまして、ここにお示したような経歴を持っている方です。ただドイツに渡る前には、明治20年(1887)に工手学校、現在の工学院大学の建築に入り、それを中退されて、東京裁判所の新築工事の製図及び現場督役見習いということですので、妻木さんが関係した、この時期は妻木さんになっていると思いますが、妻木さんの下の下くらいにいた方で、ドイツに行くにあたって、妻木さんの紹介で行った可能性、あるいは河合さんかもしれません、それでエンデが教えていた、いわゆるベルリン工科大学に入る訳です。実はこのドイツ

の学校の制度を堀内さんはよくご存知かと思うのですが、よく分からないのでちゃんと卒業したのか、どの程度の修業期間であったのか、よく分かりませんが、一応履歴書上は工科大学造家学科修業という書き方になっているのです。それで明治28年(1895)に帰国して、大阪控訴院と、神戸の裁判所の工事に関係するので、これは河合さんの履歴を見ますと、河合浩蔵さんが法務省の庁舎の工事が終わった後の、2作品ですので、河合さんとつながりの深い経歴を明治33年(1900)~37年(1904)までは持っていたということになります。その後、鉄道関係に移ります。ちょうど東京駅を造っているのと同じ時期ですね。品川から東京駅まで高架線を造るのですけれども。そこに造られた有楽町、あるいは新橋の駅をこの村上さんが担当するということになるわけです。新しい新橋の烏森駅(図16)は村上さんの設計ということになるわけで、塔にドイツ風の感じがでています。村上さんについては、国立科学博物館の久保田稔男さんが詳細に研究されています。この方達が恐らく妻木さんや河合さんの紹介によりエンデ・ベックマンと深い関係を持ちながら明治20年代の前半にドイツに留学して、ドイツで勉強をされて、建築家となった方達になります。このうち、秩父さんや村上さんは比較的、妻木さんなり河合さんとの関係が強く指摘されますが、津田さんの場合はあまり、妻木さん、渡辺さん、河合さんとは直接的には関係がないようです。



故正眞 村上 胖 著

村上 胖

図15 村上胖(『建築雑誌』1923年7月号)

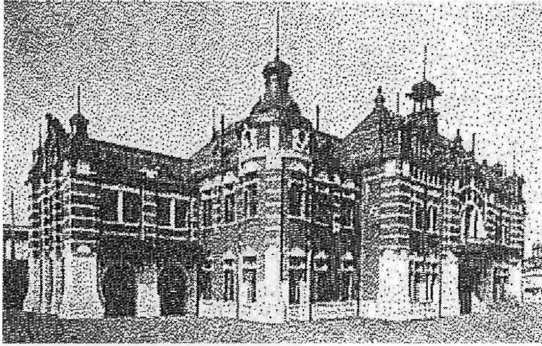


図16 新橋烏森駅（『東京市街高架鉄道建築概要』1914年）

矢部又吉のこと

この三名にさらに遅れてドイツに留学して同じベルリン工科大学に入るという方が、矢部又吉さんです（図17）。この方も横浜に縁があるということで、いろいろ個人的に調べさせていただきましたけれども、この方もたまたま青山墓地にお墓がございまして、ご遺族が鎌倉に住んでおられる

ことがわかりました。ここで紹介する写真もご遺族から提供を受けたものですが、矢部さんの奥さんの実家は早川さんという方で、デ・ラランデの住宅作品に早川邸がありますが、その早川さんのお嬢さんと結婚されております。しかも、矢部家のお墓の隣りが早川さんのお墓でございまして。どういつながりがあったかはよく分かりませんが、そういう意味では、矢部さんは妻木さんの紹介でドイツに行くということになりますが、実はデ・ラランデともかなりつながりがある。それから、ドイツに行った時に、ベルリン工科大学で勉強もするわけですが、どうもドイツに帰っていたゼールですね、リヒャルト・ゼールの事務所にも関係していたようで、そこで実地を習得するというような関係があったようです。また、この早川さんのお宅を設計したのはデ・ラランデで、それを施工したのが実は矢部又吉さんのお父さんの国太郎さんで、国太郎さんはデ・ラランデの建築をしばしば請負っています。そういう意味でいいますと、矢部又吉さんは、妻木さんとも深い関係があり、エンデベックマン事務所の代表として日本にやってきたゼールとも深い関係があり、ゼールの後を継いだデ・ラランデとも深い関係があるという建築家として、今日お話する中では一番縁が深いというような人になるのかなという気が致します。これは、ご遺族から提供を受けた写真ですが、ドイツで、修業をしていた時の写真で、これは裏に日付が入っておりまして明治42年（1909）の4月8日、この、フライブルクの劇場（図18）というところで、おそらく現場監督の一部を担っていたんだろうという



図17 矢部又吉（矢部元子氏提供）

ふうに思いますが、どうもこれがゼールが関係した作品のよう
 でして、ここにその時の、これは裏に何も書いてないんで分か
 らないんですけども、ひょっとしたらこれがゼールなのかな、
 ゼールだったらいいなというふうに思っておりますが。4・5
 年ドイツで勉強して明治44年（1911）に帰ってきて矢部工業事
 務所というのをつくるということで、これが原宿にあった事務
 所兼自邸（図19）ですが、坂本先生の話にありましたような、
 いわゆるジャーマン・セセッション風、私共がいうところのユー
 ゲントシュティル風の作品です。それから、これもご提供を受
 けた中の絵葉書でありまして白金の聖心女学院の聖堂の絵葉書
 ですが、矢部工業事務所というふうに書いてあります。これは
 聖堂ですけども、聖心女学院の校舎って

いうのは、デ・ラランデ事務所に入った、
 チェコ人のヤン・レツルという方が設計し
 て施工を矢部国太郎、矢部さんのお父さん
 がやったもので、聖堂は息子の矢部さんが
 設計をして、恐らく矢部さんがやっていた
 事務所が施工をしたんだろうというふう
 に思いますが、聖心女学院の学校史を見ます
 と、聖堂のほうが震災で倒れたらしくてで
 すね、お父さんのほうがしっかりした作品
 を造ったという評価になっております。矢

部さんの経歴とか作品は亡くなった時にですね、日本建築士会の雑誌にこういうかたちで紹介
 されているので、作品歴はかなり分かります。これは先ほどの自邸兼事務所、大正2年（1913）
 ということが分かります。それから、代表作は、川崎銀行の本店（図20）ということになりま
 しょう。これが、本店。これが、先ほどの妻木さんの横浜正金銀行本店の隣にあった川崎銀行
 横浜支店。やはりドイツという、何となく重厚という感じが、ドイツも北とか、南、東、西で
 大分違うんでしょうけれども、やはり、重厚って感じがいたします。それと、矢部さんの
 作品には、構成的な過剰さ、悪くいえばくどさがあります。そういうところがドイツらしさな
 のかなというふうに思います。これは大正期ということで、時期的にいきますと、こちらにあっ
 た明治期の正金銀行に比べますと、大分時代の雰囲気、明治の建築と大正期の違いっていう
 のが、並んでよく比較されますね。妻木さんの明治建築のほうが男性的、こちらのほうは、や
 や、ディテールも柔らかいディテールになっています。

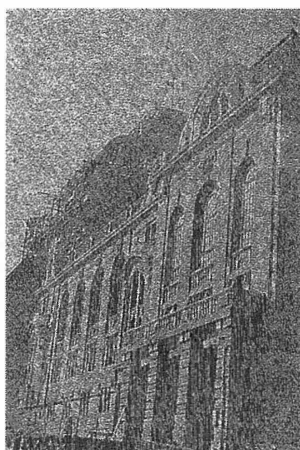


図18 フライブルク市劇場
 （矢部元子氏提供）



図19 矢部又吉邸（矢部元子氏提供）

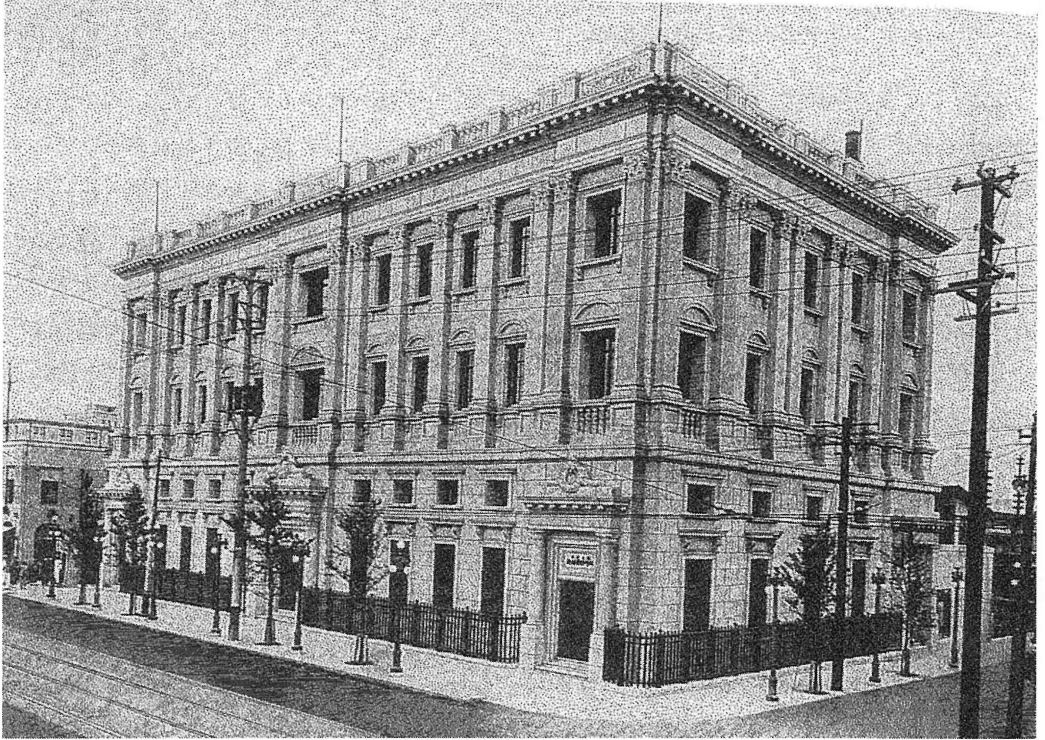


図20 川崎銀行本店（『川崎銀行本店新築概要』）

デ・ラランデ事務所の所員たち

それから、もちろん、デ・ラランデの事務所にもですね、先ほど坂本先生で14・5人という話がありましたけれども、高学歴をもった方もおるわけですが、デ・ラランデが亡くなった後の作風なりというのはあまりよく分かりません。たまたま分かるのが、そのうちの一人ですが、伊達さんという方が亡くなった時の訃報がありまして、このあたりにデ・ラランデ事務所って書いてあると思いますが。まあそういう方がいます。或いは、レジメのほうに書かせていただいた、粟谷鷲二さんという方は、東京大学の建築科を出た方でございますけれども、こういう方もデ・ラランデ事務所に在席して、デ・ラランデの作風の一端を担ったということになります。あるいは、レジメには書いてはありませんが、後に三越の家具装飾部長などされた、杉山赤四郎さんという方がおります。そういう方も、デ・ラランデ事務所で育てられたことで、若くして、日本大博覧会会場設計コンペで入賞したりしています。

ユーゲントシュティルの建築と建築家

次は、ドイツの同時代の建築に何らかの影響を受けて、直接ドイツには行ってないんですが、同時代のドイツの建築の影響を反映したデ・ラランデの作品とつながるようなものをいくつか紹介できればというふうに思います。先ほど坂本先生のお話の中で、セセッション、あるいはジャーマン・セセッションという言葉、ユーゲントシュティル、あるいはアールヌーボーというようなお話もありましたが、デ・ラランデの作品に比較的近いようなものを集めてみますと、これは横濱勉という方の明治43年（1910）の盛岡の第九十銀行の本店ですが、先ほど坂本先生のお話の中で、ルスチカ積みという話がかかなり出てきたと思いますけれども、これなどは、こういう壁面はかなり平面的な仕様でございましてけれども、要所にですね、ルスチカ積みの石を配するというので、全体でジャーマン・セセッションということではありませんが、こういう部分的なところにそういうジャーマン・セセッションのディテールを取り入れた、おそらく日本では最初期くらいの作品になるんじゃないかというふうに思います。この作品が目ざれますのは、この横濱勉という人が後の日本のモダニズム建築の中で、今言ったようなジャーマン・セセッション、あるいはユーゲントシュティルというもの、あるいはその後につながるドイツの表現派とか、そういうものにつながる中で非常にキーになる位置にいる建築家になるからであります。

で、一方、これも坂本先生のお話にありましたように、ウィーンのセセッションていうのは、ややドイツのセセッション、ジャーマン・セセッションとは違って、オットー・ワーグナーの作品にあるようにですね、非常に平面的、あるいはグラフィカルなデザインというものに特徴があるかと思っておりますけれども、そういう意味での日本のセセッションを良く反映した作品として知られているのが、京都にあります西陣織物館です。本野精吾という方の設計です。非常に平面的なグラフィカルなデザインになっている作品であることがご理解いただけるかと思っております。これが、ウィーン・セセッションの系統だとすれば、ジャーマン・セセッションというのは重厚にしていくということはですね、平面的ではなくて、いわゆるボリュームの表現みたいなものをモチーフにすると。ですから、ごてごてするっていうのは一面であろうかと思えますし、ボリュームをこう、組み合わせて造ると。だからディテールもかなりもわっとしたような傾向になっていくということになる、そういう特徴があるかと思えます。そういうことでいいますと、面と量の構成で建築を造っていきこうというようなものがジャーマン・セセッションからドイツの表現派につながる中間ぐらいに位置するんじゃないかと。ということで、その、典型的な作品、日本における作品というと豊多摩監獄（図21）になるわけで、先ほどの横濱勉という方は後に司法省の営繕に入って後藤慶二さんなんかと一緒にこの豊多摩監獄に名前を連ねることになるわけです。残念ながらこれは遺っておりませんが、こちらの方の正門（図22）は、豊多摩監獄っていうのは、沼袋と中野の中間ぐらいに位置するんですけども、今もう刑務所

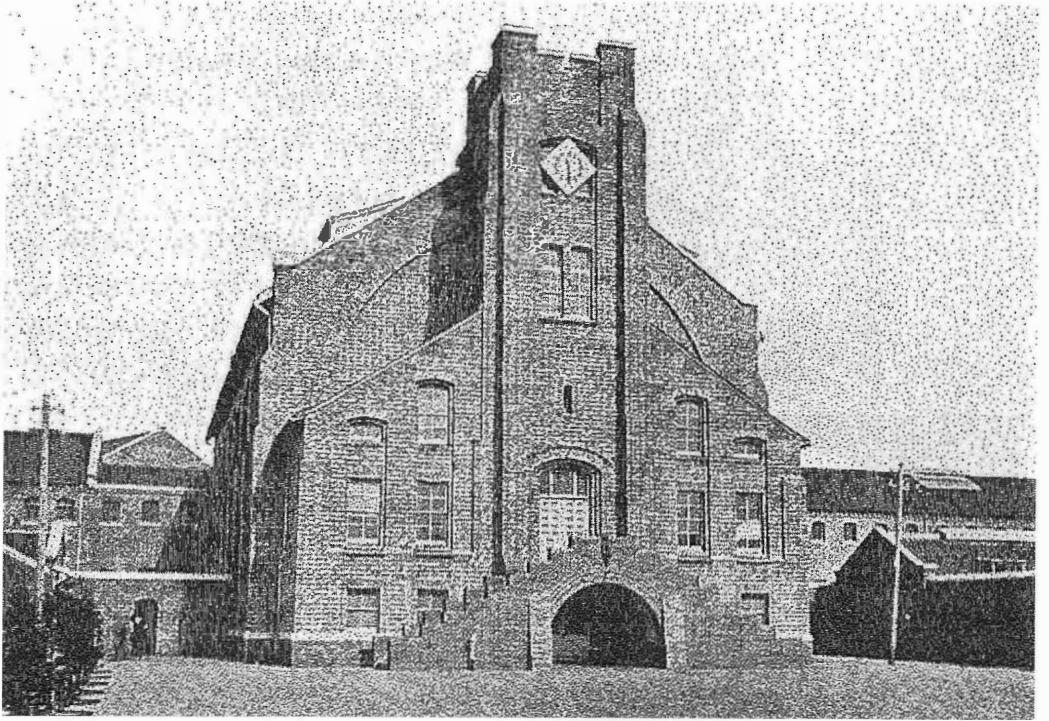


図21 豊多摩監獄本館（『建築雑誌』1915年6月号）

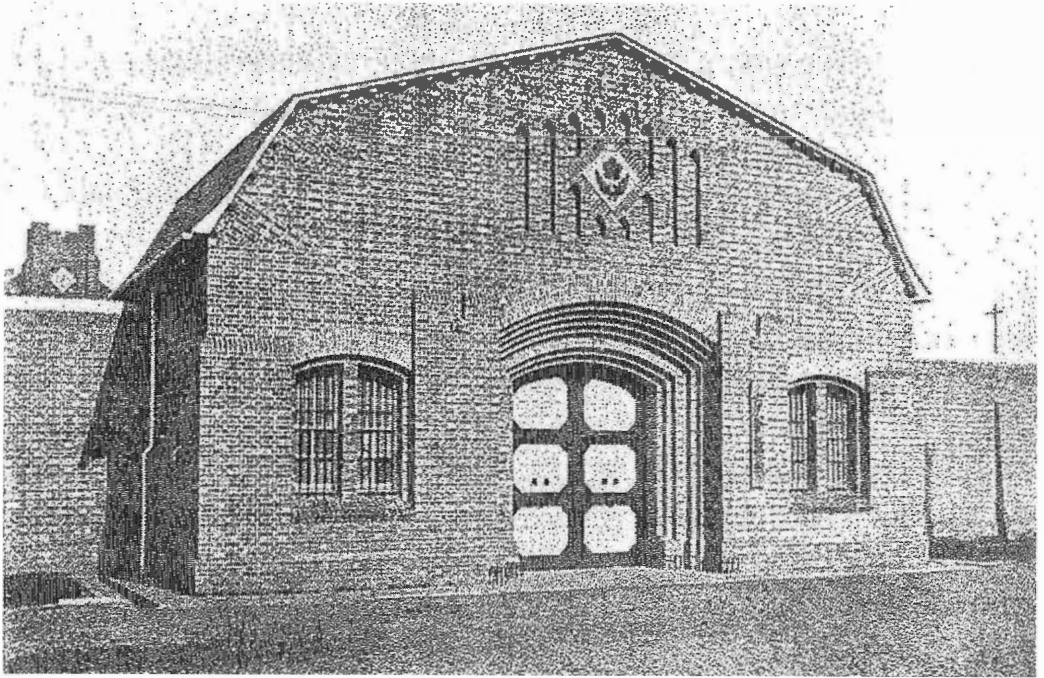


図22 豊多摩監獄正門（『建築雑誌』1915年6月号）

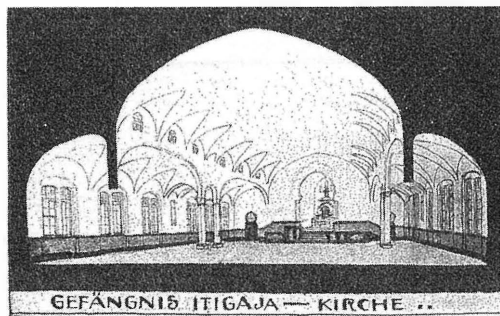
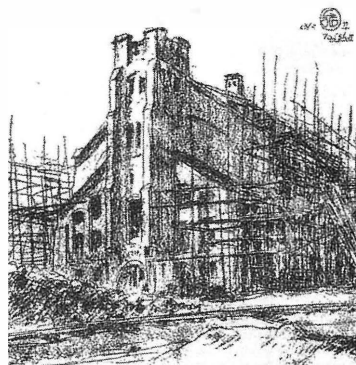


図23 豊多摩監獄スケッチ（『後藤康二氏遺稿』1925）

おりますので機会があればご覧いただけるのではないかと思います（図24）。それからもう一人、先ほど坂本先生の話で青島チンタオのものができましたけれども、実は日本が青島を占領すると、まず日本の陸軍が行くんですけれども、そこで日本の建築家がいろいろ日本人用の施設をつくることになる（図25）。これも青島のドイツ人建築家が造ったいわゆるジャーマン・セセッション、ユーゲントシュティルの影響といいますか、かなり似ている作品が、現在遺っているかどうか知りませんが、造られているわけです。これを設計された方は、三上貞っていう方でございますけれどもこの人は、東京高等工業、東京工業大学の前身ですが、そこの建築を出られて、最初に入ったのが大蔵省の臨時建築部ですので、妻木さんの下でいろいろデザインされた方になるわけですし、後に青島に移ることになって、こういうドイツの新しい様式の作品を造ることになったわけです。そういう意味でいうと、妻木さんらのドイツ派の流れがまだ、形を変えて大正期までは、いわゆるドイツ派のデザインが流れていくというふうなことが言えるのではないかと思います。さらに、こういう大正期のドイツ風建築の影響をディティールに残したという意味でいうならば、先ほどの坂本先生のスライドにもございましたように朝鮮総督府の庁舎などは、一見はルネサンス風のデザインですがけれども細部にはかなり、ユーゲントシュティルのデザインが混じっています。更に言うならば、現存する国会議事堂のデザインまでそういう影

は移転して公園になっていますが、この正門だけは遺されておりますので。先ほどデ・ラランデの作品の中で、こういうマンサード型というような話がありましたけれども、全体をこういうボリュームで表現しようというような傾向をよく代表する作品になろうかと思えます。これはもっと後の小菅刑務所の原案になったもので、ドイツ表現派の影響を受けた作品ですがけれども、こういうデザインに、ジャーマン・セセッション、ユーゲントシュティルからドイツの表現派への流れと展開をみることができるわけです。

もう一人、民間の中で、そういうボリュームの表現ということでユーゲントシュティルからドイツ表現派へ至る作品を創り続けた建築家に関根要太郎という人がいます。今日紹介します函館の二作は現在も遺って、かなり形が変わっておりますが遺って

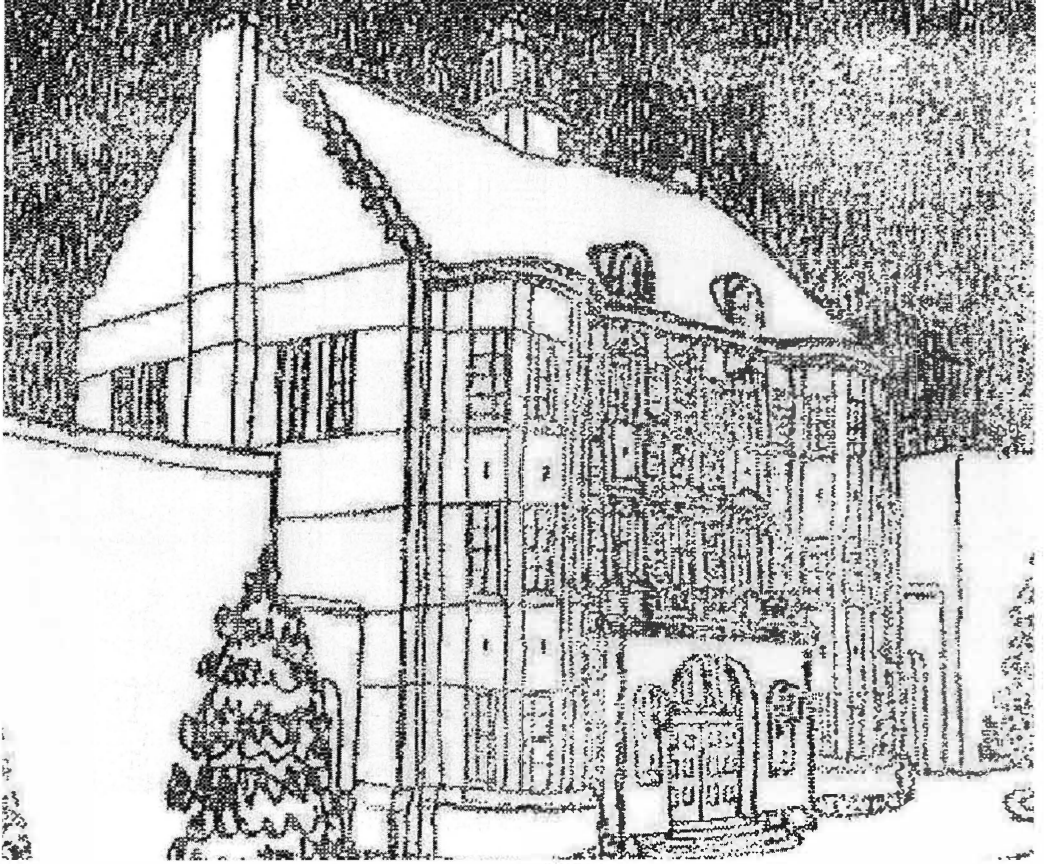


図24 函館海産商同業組合（『建築世界』1919年7月号）

響がある、認められるのではないかというふうに思います。そこまで言うならば、妻木さん、松ヶ崎さんあたりから始まったドイツの影響っていうのは、細部の中では昭和の建築まで、脈々といいですか、細々といいですか、つながっていくというふうになるのではないかというふうに思います。最後にこれは徳島市にございます、三河さんっていうお医者さんのお宅です。非常に変わったものがございますが、こういう駒形屋根の形っていうのはデ・ラランデの自邸とも共通するようなところがあります。これは時期は昭和3年（1928）ですが、実はこれを設計された方は木内豊次郎っていう方でして、この方もあまりよく分からないんですが、大正初年に徳島県立工業学校の建築科を卒業されまして、ドイツに留学したと言われている方です。ドイツで、どこで勉強されたかっていうのはよく分からないんですが、日本に帰ってきて遺した作品の一つがこれです。明かにドイツの影響は受けているわけですが、どういう影響を受けたかはよく分からないんです。中央の建築ばかりではなくこういう地方の中にも、まるで歴史の正史には載らないんですけれども、単独でドイツにいてドイツの影響を受けて郷里といいですか、地元でドイツ風の建築をつくるというような例も、その一例ですので、探せば

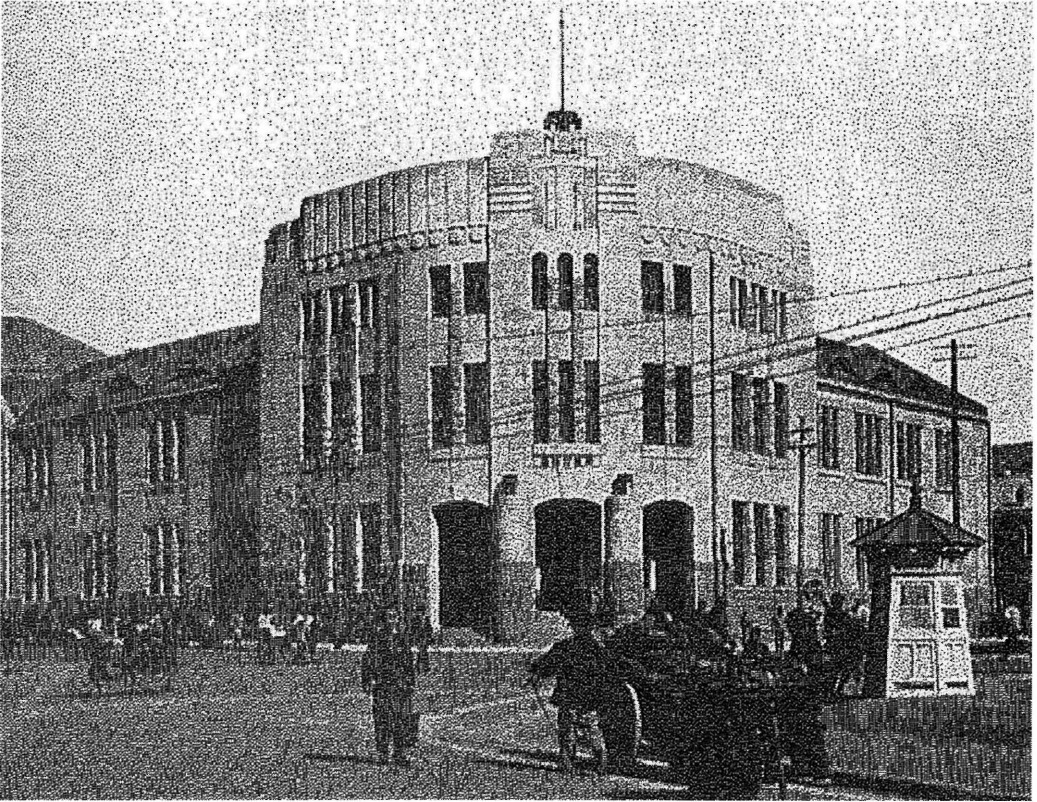


図25 青島郵便局（『建築雑誌』1920年7月号）

ですね、ドイツの影響みたいなものがそちこちに見いだされるのではないかというふうに思いますし、そういう目で見ると色々なものがまた見えてきて違った歴史を書くことができるのではないかというふうにも思ったりしているわけでございます。

どうも長時間ご静聴ありがとうございました。

（質問）

日本の近代建築というと東京駅など、イギリスが強いついていうイメージがすごく強かったんですね。でこれほどの人がドイツに留学しているというのは、理由はなんですかということと、先生から見て結局今の日本の近代建築はドイツのほうが影響が強いついていうことなんでしょうか。

（堀）

ええとですね、どういったらいいんでしょうかね。日本近代建築の全体の中で、何が主流かとかそういう話になっていくとすればですね、やはり今お話ししたようないわゆるドイツの

影響は主流ではなく、それはやっぱり、どの部分で主流かっていうことになるんだろうと思いますけれども、やっぱり辰野金吾さんはイギリスですので、イギリスに留学し、イギリスの同時代の作風を日本に持ち込んで、東京大学の建築学科で、多人数を育てたわけですので、作風的にもですね、東京駅のような辰野式、フリークラシックとってますけれども、ああいう建築が全国に銀行建築のような形で普及していくっていう意味でいうと、一番大きな、辰野金吾の先生もイギリスですので、イギリスの影響が大きいということは、一般的に言えるんだろうと思いますけれども、全体的な大きな影響ということでは、一番はアメリカということになるかと思えますね。だから、やっぱりドイツってというのはある意味で個人のつながりが非常に多い。矢部さんまでは確実にそうなので、そういう意味でいうと非常に限られた葉脈っていうんですかね。そういう感じがしますが、最後にお見せしたような徳島の例のようにね、まだ分かんないような人がひょっこりドイツにいて帰ってきて建築家になるっていうのが、白井晟一さんは有名ですけども、そういうふうな方がたくさん発掘されるかもしれませんので、一概にあんまりそういう、なんていうか、派閥みたいなことで考えないほうがいいのかなというのがあります。

(司会)

よろしいですか。

他にどなたかいらっしゃいますでしょうか。

(質問 (坂本勝比古氏))

ええと、私から。質問というか、先生は、時間の関係だったかもしれませんが、20年代から30年代のドイツ留学の建築家の系譜をお話しになっておられないので、これをお話しになると、今のご質問の答えにも大分影響があるんじゃないかと思うのですが。というのは、私はドイツの建築の影響っていうのは、そういう形で表れた事以外でもですね、精神的というか思想的に非常にあったと思うんです。で、明治の時ののはどちらかという、作品の上ででてるだけかもしれないですけども、大正の特にこのモダニズムが入ってきて、バウハウスの関係するものが出て参りますとですね、相当強い影響っていうのが、あると思うんです。で、それは日本の近代建築の中でも、今さかんに言われているその、モダニズムということになりますと、ドイツの影響というのは、大正の後半、セセッションの影響と同時にですね、例えば分離派というものをつくった東大の大正九年組という人達というのは、まあ、山田守とか滝沢真弓とか、壮々たる人がですね、ドイツの影響を強く受けてああいう運動を起こしたということは、本当は、堀先生、お話しになりたいことだったんじゃないかと思うんですが、何か、はしょったところを、質問を兼ねてお尋ねしたいんですが。

(堀)

昭和期になりますと、ある意味でバウハウス系、まあ、ドイツといますとですね、バウハウスの影響っていうことで、実際バウハウスにも行かれた方は幾人かおられますが、こういうふうに名前を幾人かだしてみますと、バウハウス以外でですね、よく分からないところに留学したりした人が幾人もいるということがあってですね、なかなかちょっとまとまった話ができないんじゃないかと、白井晟一はどういう位置付けになるのかとというふうに考えますと、白井晟一という方は昭和3年(1928)から、昭和8年(1933)なんですが、ドイツで何をしていたのかってというのがよく分かりません。というかそれ以外にもですね、実はドイツに留学したっていうのは、建築家ばかりではなくてですね、大学の先生になるような方っていうのはほとんどドイツにいております。とくに構造学者はですね。セセッションなどで有名な武田五一なんかイギリス、フランス、ドイツっていうかたちでいておまして、そういう形で本当に見るならば、今日お話しした以外の話っていうのはたくさんありまして、今日のタイトルがデ・ラランデがメインでございますので、デ・ラランデつながりでいうとやはりどう考えても松ヶ崎さんから始まって、やっぱり大正期くらいまでかなと。それ以降の昭和期はまた局面が変わるといいますか、時代相が変わった中での話を改めてしなくてはいけないのかなということで、実は省略させていただいた次第で、ご勘弁願えればというふうに思います。

(質問(堀内正昭氏))

質問ではないのですが、確かにドイツ派は、エンデとベックマンの来日から始まりました。ただ、エンデ&ベックマンはドイツを伝えたのかなという気がします。言い換えればエンデ&ベックマンが伝えたものは何であったのかということです。彼らがドイツ人だから彼らと繋がっていた建築家をドイツ派と呼んでいますが、結果的に言うと、エンデ&ベックマンが伝えたのは、インターナショナルな一流の歴史主義であります。ドイツからの連想で、重厚とか、武張ったとかいう言われ方をするときがありますが、ヨーロッパの基本的なあるいはどの国の建築家がやってもおかしくない歴史主義が持ち込まれたので、あんまり国籍に囚われていると、見方において正しくないことになります。むしろ、エンデ&ベックマン以後の建築家、デ・ラランデのような建築家の方が、ドイツ的な作風を持ち込んだのだらうと思います。

(司会) 有り難うございました、先生宜しいですか？

(堀) むしろ建築家のことはいろいろな方がいろいろ調べて頂ければと思うのですが、もう一つはやはり、ベックマンに関係してですね、職人職工達と一緒に行って、建築家の影響はいろいろあるんでしょうけれども、それ以外のところで、相当な影響を与えているはずでして。実際ですね、建築現場のなかでですね、そういうものが、よく分からないんですけども、そ

ういうところが重要であるし、今後いろいろ調べていくと、かなりの細かいことになる、建築材料の話になるかも知れませんが、そういうものの総体として建築が、あるということの意味をもう少し、エンデ・ベックマンがかなりの職工職人達をドイツに留学させたという事実があって、その後どういう展開があったのかというのはかなり大きな研究課題であろう、そういったことを多少なりともお伝え出来れば、今日の役目は果たせたのかな、ということでお話しさせて頂いたところでありまして、そのへんがどうなるか、自分も関心をもって調べて行きたい所でもありますけれども、何分調べにくいところでもありますので、皆さんももし、御関心があるのであればですね、先ほど何人かゾロゾロと名前を出しましたけれどもね、お調べになると非常に興味深いんでないかと、思います。今日はどうも有り難うございました。

正誤表

該当箇所	誤	正
129 頁	図 7 旧最高裁判所使用表積煉瓦(横浜開発資料館『日本の赤煉瓦』1985)	図 7 旧最高裁判所使用表積煉瓦(横浜開港資料館『日本の赤煉瓦』1985)